『創立110周年』新たな歴史の第一歩

明治・大正・昭和・平成超えて5つ目の令和

ひとつひとつの時代に足跡を残して
記念式典（きょうの）コロナ禍の中で開催と決定

創立百周年の大きな節目から、新たに十年の歩みを刻み、百十周年の節目。同校の渡辺治夫校長（五九）、同窓会の岡田竜一会長（五七）、そして、創立百十周年記念事業実行委員会の加藤一芳委員長（五六）に在校時の思い出はじめ、同校の特徴・特色・校風、さらに、これからの東高校の役割などについて語ってもらった。

講演も祝賀会も見送ったが
生徒用ロッカー更新

創立記念事業の企画にあたり、実行委員会設立準備会が開かれたのが平成三十一年二月。その翌月、三月十八日に第一回実行委員会が開かれ、二年十月二十四日に記念式典、さらに記念誌の作成、記念講演会、記念祝賀会の開催など日程や記念事業の概要を確認して準備作業がスタートした。

ところが、その後、新型コロナウイルス感染症が猛威をふるい始めた中、県内の各校でも臨時休校の措置がとられるなど、学校生活そのものにも影響が出始めたことを受け、同実行委員会は昨年四月に一年、先送りすることを決定。その年の十一月、第七回実行委員会でことし十月二十二日の開催を最終決定した。

開催、延期、中止と複数の選択肢があった中、委員長判断・決断がポイントともなった。実行委の加藤委員長は「コロナ禍の状況に日々、ドキドキだった。PTAからは『本当にやるの？』との声も出ていましたから。その中で生徒の健康、安全を徹底した上で開催しようと。記念事業を簡単に見送っていいのか。果たしてそれでいいのか、と、葛藤もあった。しっかりと周年事業の形を残すことは大事なことだと考えて、開催を決断しました」。

しかし、そうは言ってもコロナ禍の収束がなかなか見通せない中、外部からも聴講者を迎える記念講演会や、大勢での飲食を伴う祝賀会の開催は見送ることに。講演や祝賀会を見送った一方、限られた予算の中で、生徒たちが喜ぶ環境整備をと、生徒用ロッカーの更新を記念事業に組み入れた。

渡辺治夫校長

新たに医療専攻が導入
医療現場の人材育成へ

「いろいろなリスクを避けるため、万全を期した。こうした状況の中、募金活動も行わず、身の丈に合ったことを粛々と進めて、大切なことをしっかりやろうと、準備してきた」と振り返る。

創立百年の大きな節目から、新たに十年の歩みを刻んできた。この間の同校について、渡辺治夫校長は「大きなことでは、新しい役割が与えられた時期だということ。この地域の医療系人材を育成していくための医療専攻という新しいカリキュラムが導入された。看護師、理学療法士、検査技師などの分野をめざす生徒たちに対し、病院見学、医療関係者を迎えての講演会などを通じて、将来の自分自身の医療従事者としての心構えを練って、高校卒業後、大学や専門学校に進学して、資格を取得、将来、医療現場で活躍していく、そういう人材を育成していこうという任務が与えられた」。

平成二十七年度から導入されたこのカリキュラムは二年生のとき、放課後授業として、一単位分（三十五時間相当）を受講、学ぶもので、年間、三十人前後の生徒が希望。二十八年度に二年生として受講した一期生のうち、三年制の専門学校等に進学した生徒は今春から医療現場での仕事をスタートしているという。今年度は男女合わせて二十二人（二年生）が医療専攻を受講。二年後には県央基幹病院も開院する中、さらにその役割は重要性を増していくことになる。

学校、同窓会、実行委員会の最終打ち合わせ

おっとり校風、まじめで誠実
校歌でも誠実、明朗、創意

明治、大正、昭和、平成、そして令和と長い歴史を刻む同校の特色・特徴等について渡辺校長は「校歌でも歌われているように、誠実、明朗、創意、この三つを大事に継承し、息づいている。それが礼儀正しさや、あいさつのすがすがしさを身につけることにつながっている。その上で、しっかりとやり抜いていこうという生徒たちが学んでいる。そうしたことが特徴の一つでないか。高校時代は一度きりの中、それを意識しながら、素直な生徒たちが頑張っている。そうした生徒たちでいっぱいだと自負している」と強調した。

また「女子校という出発点があったからなのか、いい意味でおっとりとした校風だと感じている。非常にまじめで誠実。それが校風でないかと思う」（加藤実行委員長）の指摘に今後の同校の役割等について、渡辺校長は「この地域をしっかりと支えていく人材を育成していく。大学へも多くの進学者を出している中、医療系人材育成という新たな役割も担うようになった。将来的にこの地に残り、この地域を支えていく、あるいは日本各地で社会を支えていく、さらに世界に羽ばたいていく、そういう役割を担っていると思っている」と力を込めた。

加藤一芳記念事業実行委員会委員長

竹刀の先生が待ち構えて
遅刻すると教職員玄関から

昭和五十七年三月、旧校舎最後の卒業生となった同窓会の岡田竜一会長は「自分の人生で高校時代が最も楽しく充実していた。授業は水曜が四限で終わり、土曜は三限で終わり、放課後は部活ひと筋という日々。中間、期末考査は一夜漬けも多かったけれど、たいへん幸せな時代でしたって」と、在学時を振り返る。

男女共学となって六期生、当時は木造校舎だった。「いつも始業に遅れると、正門が閉められてしまい、教職員玄関に回ることになるんですが、竹刀を手にした先生が待っていて、しかられたものです」。

また「三年生のとき、英語の授業でクラスの大半の生徒が宿題を忘れてきたことがあったという。「先生が怒って、『なんで忘れた？』で、授業は終わり。そのときの反省もあったのか、その先生のテストで九十四点を取ったことがあって、回答用紙に『エクセレント！』と書いてあって。ベリーグッドの上でしたから、あれは忘れられないできごとですね」。

スティック取り上げられて

音楽バンドを組んでドラムを担当していた加藤実行委員長は「自習時間にスティックで両ひざをたたきながらリズムを取っていたら、隣の教室の先生が来て、スティックを取り上げられてしまって。どうなったかと思ったら、その先生は授業で黒板を指す棒として、スティックを使っていたことがあったなぁ」と応じ、二人そろって「穏やかな校風で、個性的な先生が多かったし、心の通う授業だったかなと思う」と懐かしんだ。

岡田竜一同窓会会長

120年、200年と続くためには

今年度で定年を迎える渡辺校長は、津南中等教育学校で最初の校長を務めたあと、平成三十一年四月に同校に着任。一年遅れとはいえ、校長として百十周年の記念式典を迎えることに関しては「すごい巡り合わせ。節目に立ち会わせて頂き、ある意味、ありがたいことだなあと思います。その場に居合わせた生徒たちが学校の節目に在学して、頑張っていたんだよね、という思いと、式典を機会に学校の歴史を振り返りながら、今日に至るまでを思い返し、しっかりしたおとなになって、社会に出ていかなければならない、という思いを強くしてほしい。学校が百二十年、二百年と続いていくためには百十年を通らないといけないわけですから」と、在校生に期待を寄せた。

制作発表後、スタッフたちと戸隠神社を参拝した水野さん

在学当時の水野久美さん（80周年記念誌より）

昭和30年卒業の水野久美さん（84歳）
32年松竹映画でデビュー
俳優座養成所を経て東宝入り

日本を代表する女優として活躍
ご当地映画（平成23年）でラーメン屋
燕市が舞台で大喜びだった

2011年5月、燕市をロケ地に行われた映画の制作発表であいさつする水野さん

同校の歴代卒業生の中に卒業後、今なお女優として活躍しているのが水野久美さん（六四）だ。水野さんは昭和三十年に同校を卒業後、三十二年には松竹映画でデビュー。俳優座附属の演劇養成所の八期生で、三十三年に卒業後、東宝入り。以来、女優として活躍の場を広げ、今では日本を代表する女優だ。

同校創立八十周年記念誌によると、平成四年一月三日、地元のテレビ番組に当時の内山裕一三条市長と出演した水野さんは「東高では演劇部に所属し、演劇だけをしていました。生家の隣が三条座だったので、その芝居を見て育ちました」と振り返り、「今後は三条の刃物のように〝切れ味〟のある女優になりたい」と、抱負を語っていた。

その水野さんは平成二十三年五月、燕市を舞台にしたご当地映画「アノソラノアオ」（ナシモトタオ監督）に市内のラーメン屋の店主役で出演。吉田産業会館で開かれた当時の制作発表会で水野さんは「芸暦五十二年、やっと新潟の言葉が言える映画です。それにラーメン屋の店主役。ご当地映画出演は初めてで本当にうれしい。ここぞとばかりに新潟弁を発揮したい」と、気合の入ったすてきな笑顔を見せた。

そのあと、スタッフ、キャストがそろって戸隠神社での撮影祈願に臨み、撮影の安全と映画の無事完成を祈願。当時、神社境内には地元の人たちやファンなど百人ほどが一行を待ち構えており、バスから降りると、歓声が上がり、水野さんは軽く手を振ってこたえていた。

水野さん在学時の演劇部・後列左端が水野さん（80周年記念誌より）